

1 石器を使った人びと

■ 人類の誕生

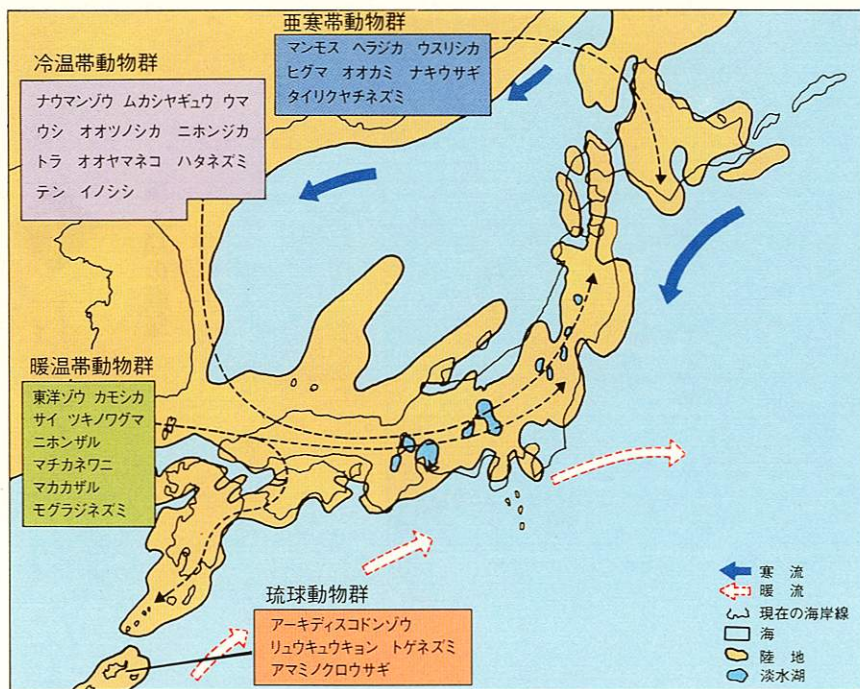
地球上に人類があらわれたのはいまから約四〇〇万年前のことだと考えられている。その進化の過程は人類学的に猿人（四〇〇万〜一〇〇万年前）から原人（一〇〇万〜一五万年前）へ、原人から旧人（一五万〜三万年前）へ、そして新人（三万年前〜現代）へと進化し四つの段階に分けられている。わが国で発見されているものとも古い人骨は、愛知県豊橋市でみつかった牛川人^{うしかわ}とよばれるもので、

四段階のなかの旧人に属するものである。日本列島にこのような旧人たちが住みはじめたころは、中国大陸や朝鮮半島、日本列島に数回にわたって氷期がおとずれ、寒冷な気候に見舞われていた時代であった。

地球が誕生してから現在まで、氷河が広く発達した時代が三度あったといわれている。このような氷期の寒冷な気候によって、海面がいちじるしく低くなり、日本列島と大陸とがつながった。日本海は内陸海となり、日本海と外海とをつなぐ対馬、津軽、宗谷などの海峡が閉ざされたり、あるいは氷床となったりしたため、そこを通って、動物などが大陸から移動してきた。のちに気候が温暖化すると、海面が上昇して現在とほぼ同じよ



旧石器時代のおもな遺跡と化石人骨の出土地



氷河時代の日本列島と動物群の動き (『週刊朝日百科日本の歴史』参考)

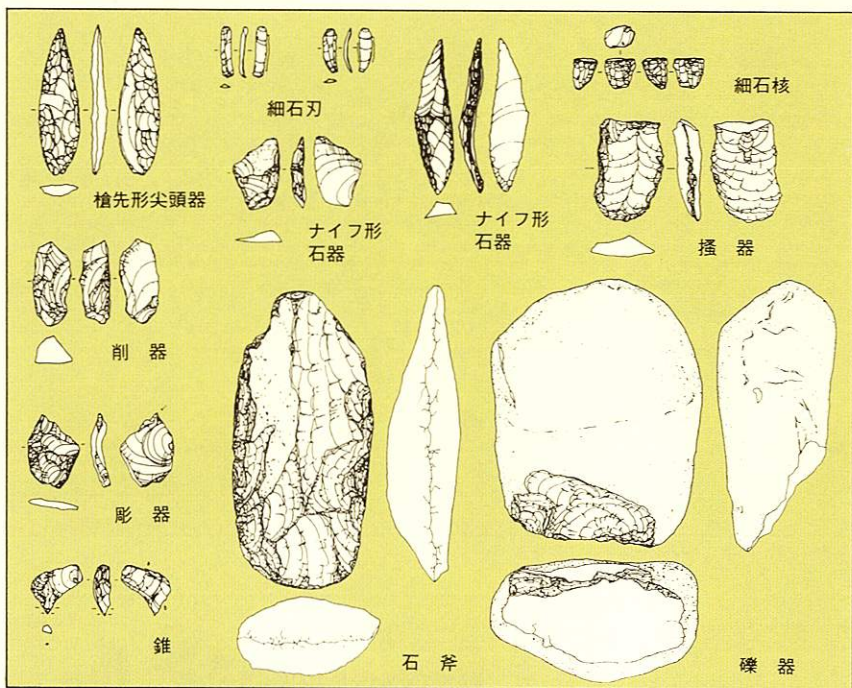
うな日本列島となったが、大陸からやってきた動物たちは、そのままとどまったと考えられている。

■日本の旧石器時代

人類の歴史は、使用した道具の素材によって、石器時代、青銅器時代、鉄器時代という変遷をたどった。そのなかでいちばん長かったのは石器時代である。

石器時代は、おもに打ち割ってつくった石器を使い、狩猟、採集の生活を営んだ時代の旧石器時代と、研いだり磨いたりしてつくった石器や、土器を使い、主として狩猟、漁撈、採集のほかに、原始的な農耕の生活を営んだ時代の新石器時代とに分けられる。

わが国の石器文化は、長いあいだ新石器時代に属する縄文時代がもっとも古い文化だと考えられてきた。しかし、一九四九年(昭和二十四)の群馬県の岩宿遺跡の発見によって、旧石器時代(一万三〇〇〇年以前)の文化があったことがわかり、それ以来、各地で三万年以前の遺跡をはじめ、数



旧石器時代に使われたおもな石器

多くの旧石器時代の遺跡がみつかっている。東京周辺では、約三万年前までのものが発見されている。

■多摩の旧石器文化

武蔵野台地をおおっている赤土、すなわち関東ローム層は、上から（新しい時代から）順に、立川ローム層、武蔵野ローム層、下末吉ローム層、多摩ローム層と重なっている。武蔵野台地や多摩丘陵の旧石器時代の遺跡の多くは、約三万年前から一万年前に形成された立川ローム層のなかから発見されており、多摩川や荒川の支流が流れ込む台地の縁にある。

多摩川の支流の一つである野川を中心に分布している武蔵野台地の遺跡は規模が大きい。これらの遺跡からは、約三万年から一万二〇〇〇年前ごろ使われた、食糧を切るための道具と考えられるナイフに似た形に仕上げた石器（ナイフ型石器）や、槍の先を思わせる尖頭器（先端が鋭く尖った石器）など、数多くの遺物が出土している。この



多摩川流域の主な旧石器時代の遺跡分布図(『東京の三万年』参考)



鈴木遺跡(小平市) 鈴木遺跡は約3万年前から1万3000年前の関東を代表する旧石器時代の遺跡で、11万点を越す遺物が発見されている。

ことから、野川流域の平坦な土地は、人びとにとって生活しやすい場所であったことを物語っているといえよう。これに対して多摩丘陵の遺跡は、平坦な土地が少ないためか、野川流域にくらべると、遺跡の規模が小さいものとなっている。

このように、多摩地域では旧石器時代の遺跡が数多くみつかっているが、福生市内からはまだ明確な遺跡は発見されていない。

しかし、市内の台地上にも旧石器時代の遺跡が存在する可能性は大きいと思われる。隣接する立川市砂川地区では、台地上から遺物が出土しているところから、市の北東部の多摩川から離れた段丘にも、旧石器時代の人びとが生活できる環境があったと考えられるからである。